

メッセージ「真実を見て、偽ることなく語る」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 28章11-15節

先週は、イエス・キリストの復活、死からの引き起こしを記念するイースター礼拝でした。思えば今年のイースター礼拝は、新型コロナで最初の「緊急事態宣言」が出され、皆で集まって礼拝をすることが出来ませんでした。未知のウイルス、病気に対して、大感染を起こしている世界のニュースを見ては恐怖を覚え、子どもたちの通う保育園も学校も休園・休校になるという事態でした。今年のイースター礼拝では、私は次のようなメッセージを語っていました。

「新型コロナウイルスという火に見舞われた世界は、これから精錬されていき、これまで『価値あり』とっていたことの数々が、^{るっぽ}坩堝を経て、メッキがはがされて燃え尽きたり、単なる石とっていた中から金が出て来たりしていくのではないかと思います」

「イエス様の復活、死からの引き起こしは、十字架以前の状態に戻るといふ単なる『復旧』ではなく、弟子たちはそこから新しい生き方へと歩みを起こされて行きました。現代を生かされている私たちもまた、この新型コロナという困難の中にあつて、復活のイエス様と共に新しく生き直す道、新しい命へと招かれているように思います。^{るっぽ}坩堝の中で全てが溶かされてから、再び構築されていくもの、本当に大切なもの、死を越える命、それらを求めて行きたいと願います」

しかし、どうでしょうか。私たちの社会、生き方はこの一年間でどれだけ変わったのでしょうか。確かに、いつでもマスクをするようになり、どこでも消毒をするようになり、旅行や外食をする機会も減ったかもしれませんが、根本的な所、「何を一番大事にしているか」という部分は、この一年間で何か変化があったのでしょうか。火による精錬の^{るっぽ}坩堝を経て、何か良いものは出て来たのでしょうか。それとも今はまだその渦中^{かちゅう}で、メッキが剥がされている最中でしょうか。

今年の4月、緊急事態宣言中の大阪の感染者数は多い日で90人や80人でした。今は3度の緊急事態宣言を経て、その10倍、800人や900人を越えています。にも拘わらず緊急事態宣言が出されるわけでもなく、「まん延防止等重点措置」という新しい言葉が作られただけです。ウイルスは変異を続け、明らかに感染力が高くなり、症状も重症化していますが、日本社会全体としては、今年の春のような危機感はありません。「4人以上での会

食はしないでください」ということが、政府からも自治体からも呼びかけられていましたが、3月に緊急事態宣言が解除されてからは、歓送迎会の時期であるということもあって、多くの所で大人数での会食があったようです。そこには「やっぱり送別会はしないといけない」とか、「自粛疲れ」や、「飲食店を応援するため、経済を回すため」など、様々な理由があったのでしょう。とはいえ「4人以上での会食はしないでください」と呼びかけていた当のお役人たちが、大人数での会食をして、感染者が何人も出た。にも拘わらず、そのことを追及されると、「因果関係は分からない」と答えていたと報じられているのを見ると、もはや人々を守るはずのリーダーたちの言葉すら、信用できなくなってしまいます。

日本語には「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。また「事実をして語らしめる」という言葉もあります。厳然たる事実を提示すれば、必ず理解・納得してもらえるはずだと思って来ましたが、今や「真実を見て、偽ることなく語る」ということ、それ自体が、絶滅寸前なのかもしれません。人々の上に立つ為政者たちすら、真実を見ても、見て見ぬふりをして、偽って語っています。なぜなら「立場上、そう言わざるを得なかった」ということ、なのでしょうか。そんな「自分の立場を守るために、事実を事実として認めない」ということは、今に始まったことではなく、昔からあったことでした。

今回の聖書のお話もその一つです。今回のお話の主人公はイエス様のお墓にいた兵士、番兵たちでした。この兵士たちは誰かと言うと、この28章の一つ前の27章の62節～66節に書いてあります。イエス様が十字架で殺され、その遺体が墓に納められた後、祭司長たちとファリサイ派の人々、即ちイエス様を十字架にかけた指導者たちは、ローマから派遣されていた総督ピラトのところに集まって言いました。「あの者がまだ生きていたとき、『自分は三日後に復活する』と言っていました。ですから、三日目まで墓を見張るように命令してください。そうでないと、弟子たちが来て死体を盗み出し、『イエスは死者の中から復活した』と民衆に言い触らすかもしれません。そうすると、人々は前よりも、もっとひどくだまされることになります。」そしてピラトは「番兵を出してやるから、行って、思うとおりに見張らせるがよい。」と言いました。

そういうわけですから、「マタイによる福音書」では、女性たちがやって来て、空っぽのお墓を見て、み使いと出会った時、そこにはピラトのもとから派遣された番兵たちも一緒にいました。しかも、彼らは「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」(28:4)ともありました。よっぽ

ど驚いたのでしょうか。ですが、女性たちがイエス様の「復活」を認めたのは違い、彼らは同じ出来事を経験しても、全く異なった行動に出ました。急いで都に戻り、祭司長たちに相談したわけです。もしもイエスの遺体が墓から無くなったということが総督にバレたら、自分たちは責任を追及されて処罰されてしまう、と心配したのでしょうか。さらに祭司長や長老たちは、「あのイエスが復活した」などと民衆が騒ぎ出すと立つ瀬がありませんから、兵士たちに対して、多額の金を与えた上で『弟子たちが夜中にやって来て、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。もしこのことが総督の耳に入ったとしても、うまく総督を説得して、あなたがたには心配をかけないようにしよう」と言って、兵士たちを言いくるめました。実際に、「私たちが寝ている間に、盗まれました」と言えば、見張りとしての仕事をきちんと遂行していなかったということになるので、却って処罰されそうなものです。祭司長たちや長老たちもまた、自分たちの保身のことしか考えていなかったわけです。この後、この番兵たちは「祭司長たちや長老たちに教えられたとおりにした」そうですが、その後のことは分かりません。ローマ帝国の威信を損ねたということで、やはり処罰されたのかもしれませんが。

番兵たちが見張っていたお墓に、女性たちがやって来て、み使いと出会い、空っぽのお墓を見た時、番兵たちも女性たちと同じように、イエス様の「復活」を認めることも出来たはずですが。また女性たちの報告を聞いた弟子たちが、それを信じたのと同じように、祭司長たちや長老たちも番兵たちの報告を聞いて、それを信じることも出来たはずですが。にも拘らず、彼らにそれが出来なかったのは、自分たちの間違いを認めたくないから、自分たちの今の立場を守りたいから、人々から責任を追及されたくないからであり、それ故に真実を見ても偽ってしまったのではないのでしょうか。彼らはその時、一瞬の自分の立場を守りこそすれ、復活のイエス様による真の命、永遠の命に気付くことはありませんでした。

経済学者の安富^{あゆみ}歩さんは、日本社会は「立場主義」であると言ひ、多くの人は命よりも何よりも立場を守ろうとしていると指摘しています。例えば、今から400年以上も昔、1603年頃に長崎で発行された『日葡辞書』^{にっぽ}という辞書があります。これはイエズス会の宣教師たちが、新しくやってくる宣教師たちが日本語を学ぶために、当時の日本語をポルトガル語で説明した辞書ですが、その中にある「立場」という言葉には、「立場を去らず討ち死にした」という用例が挙げられています。自分に与えられた立場、役目、面目^{めんぼく}のためには、命すら惜しまない……。日本社会には、そういう気質

が何百年も昔からあったのでしょう。それこそ「主君のためなら、お家の^{いえ}のためなら、命を惜しみません」というのも同じでしょうし、現代社会で言えば「仕事のために働いて働いて、その結果、過労死しました」というのも同じ構造なのでしょう。

何が事実で、真実がどこにあらうが、そんなことは関係ない。とにかく今の自分の立場を守ることこそが大事……。だからこそ、これだけコロナの感染者が増えても、大人数での歓送迎会を行い、その場で感染者が増えても「明確な、因果関係は分からない」と言えるのでしょう。事実を認めない、隠ぺいの際たるものは、福島原発事故です。10年前の事故当初から、「ただちに健康被害はない」をくり返し、安全基準に照らして住民を避難させるのではなく、住民を避難させなくても済むように安全基準を大幅に緩和しました。さらに莫大な税金を投じて、被害者や避難者を支援するのではなく、「風評被害と戦う」と言って、安心安全キャンペーンを行って来ました。周辺地域で甲状腺がんが診断される子どもが増えているにも拘わらず、「それは被ばくとは関係がない」と言い続けています。さらにこのコロナ禍のどさくさに紛れて、とうとう福島第一原発の汚染処理水を海洋放出する方針が決定されそうです。世論調査ではほとんどの人がもはや開催を望んでいない東京オリンピックも、そうでしょう。一体、誰の何を守ろうとしているのか。本当にそれは人々の命を守る選択なのか……。肉体の死から引き起こされ、墓穴に閉じこもっておられなかったイエス・キリストに従うということ、その復活のイエス様と出会うということ、それは「立場を守って討ち死にする」のではなく、むしろ「立場」を離れて、真実の命を生きるということなのではないでしょうか。

「コロナ禍」という名前がすっかり定着した昨年からの状況の中で、私たちはまだ^{るっぽ}地獄の中にいます。私たちの教会も、本当に復活のイエス様と出会い、その後について歩んでいるかが問われています。「教会だから礼拝がなければいけない…」「日曜日だから教会に集まらなければいけない…」そのように考える時、私たちは教会や礼拝の本質、死から引き起こされ、今も全ての人と共におられる復活のイエス様の方ではなくて、自分たちがこれまでに築き上げて来た「立場」の方に目を向けてしまっていないでしょうか。「真実を見て、偽ることなく語る」…。それはなかなか難しいことです。^{おびや}勇気の要ることです。これまでに経験したことがない、自分の「立場」を脅かすことかもしれません。それでも復活のイエス様、真実の命は、そこにしかありません。私たちは今も生きて、共にいてくださる神様と共に、「立場」ではなく、命を守る歩みへと、導かれて行きます。